

鷹の目の狩人



コレクターの活躍

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

早朝、寒冷の屋外、多くの人が入り乱れているここは郊外の骨董市会場。朝4時、まだ暗い冬の屋外で懐中電灯を手にさすう人々。どう考えてもコレクターの時間軸はずれています。朝3時半、動いているのはコンビニと牛丼屋、ガソリンスタンドと路線大型トラックとコレクターのみです。求めているのはオンリーワン、新資料の発見です。10時に開く、骨董市や古書店会場は1時間前から長蛇の列です。デパートの不況時の呼び物になっていますが、彼らは会場だけで立ち去ります。今作れるもの、複数あるものは論外です。みんなオンリーワンを求めて、最大の努力をしています。

30年近く企業で開発を担当しました。開発担当者からみれば、既存のすべての物は過去です。市場にある、いつでも購入できる物です。市場にない物、今、存在しない物を探し、顧客に提供できれば、それは新規ビジネスとなります。業界と企業の未来を切り開けます。顧客の課題に耳をダンボのように傾け、世界中を駆け巡り、日本中から課題の解決策を提供する。場合によっては自ら設計し、生産することになります。全く違う市場の機器を利用することも可能です。開発担当者は課題のコレクターであり、課題解決手段のコレクターであるわけです。未知の物の探究にはリスクがあります。それを許容する企業風土、オーナーの理解が必要です。そこには、業界を鳥のように大局から見、アリのように細心の注意で観察する目、何にでも反応する繊細で大胆な心が必要です。

忙しい人はコレクションをゲットできないか、いや、そのようなことはありません。政界、経済界のトップの方々のコレクションは素晴らしい物です。目を見張るものがあります。ただ、博物館の収蔵品や、これらの方のコレクションは終着点です。すべての物が価格の低いところから高いところに流れる。その終着点であるわけです。コレクションをされる方が、経済的に困って手放されるという

ことは殆どありません。景気が回復し、高くなれば、自然に物は動きます。不景気であれば、物は出てきません。東京の一流オークション、入札会、一流の骨董店、古書店には、いつも、お宝があふれています。コレクションの理解者が不在になった、例えば、先祖伝来の物や、先代が集めた物で継がれる方がいない等の場合、廃棄物として捨てられる場合もあります。これを救うのが古物業者であり、コレクターです。

それから、終点までの道のりは遠い場合も、近い場合も様々です。どの段階でも、コレクションをゲットすることは可能です。企業社会でも、利は元にあるといえます。元を求めて奔走しているのがコレクターなのです。ただ、待っていても情報は集まりません。いかに実行するかです。指をくわえていては企業の発展はありません。企業もコレクターも、自分の、自社のターゲットを求めて、東奔西走するのです。コレクターは骨董市、古書市、入札会、競市、骨董店、古書店等、すべてに出会いを求めます。夜討ち朝駆けという言葉はコレクターのためにあるのでしょうか。実行なきところに成果がないのは、すべての社会に共通します。



骨董市風景・東京ビックサイトにて

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH